

科学と社会委員会 メディア懇談分科会（第24期・第10回）
議事要旨

日時：令和2年7月16日（木）11：00～12：00

場所：5-A（1）会議室

出席者：渡辺委員長、土生副委員長、遠藤委員、武内委員、赤阪委員、山極委員（ビデオ）、
三成委員（ビデオ）

議題：

1. 学術フォーラムの進め方について
2. 来期の申し送りについて
3. その他

配布資料

資料1 前回議事要旨

資料2 学術フォーラム「メディアが促す人と科学の調和ーコロナ収束後の公共圏を考えるー」プログラム

資料3 科学と社会委員会メディア懇談分科会委員名簿

議事内容：

- （1）渡辺委員長より、前回議事要旨に基づき内容の確認及び進捗状況の説明があった。以下、前回分科会より進捗があったものについて概要を記載。

○記者会見のオンライン開催について

- ・6月17日学術フォーラム「人生におけるスポーツの価値と科学的エビデンス新型コロナ感染収束後の社会のために」においてオンライン記者会見を実施した。また、7月20日に新型コロナに関する日本学術会議の取組についての記者会見をオンラインで開催予定。

○新型コロナウイルスに係る学術会議からの情報発信について

- ・学術会議ホームページ上に特設ページを設置。トップページからリンクを張った。
- ・7月20日に日本記者クラブ主催の記者会見（オンライン）を開催予定。なお、今回の記者会見の内容は主に国内向けのため、フォーリンプレスセンターでは実施しないこととした。

○学術会議ホームページについて

- ・「未来からの問い」の対談動画を掲載。学術会議の四役といろいろな分野の方が対談しているが、高校生（県立福島高校）とも対談を行った。学校側も全教職員に情報を配って、高校生にも見てもらった。また高校のホームページに対談のリンクを張っていただくなど、協力いただいている。高校生に見てもらうことを希望するのであれば、実際に高校生を巻き込むのが一番よいと考える。

（2）意見交換

- ・新型コロナの影響で、国際会議もオンライン開催となっている。参加者は通常で開催であれば50～150人程度のところ、オンライン化により500～600人になっており、参加のハードルが下がっている。今は新型コロナの影響でオンライン化せざるを得ない状況であるが、

オンライン化に伴い、会議参加のための移動に係る費用や日程などの制約がなくなっている。フィジカルとバーチャルの融合など、今後の社会の在り方やメディアとの関係についても今までと考え方を変える必要がある。

- ・オンラインでの記者ブリーフィングについては、メディアも歓迎している。参加者もカジュアルな形で参加可能。オンラインによるメディアへのアプローチが今後重要な活動になってくると思う。
- ・他方、オンラインの場合、多くの記者が参加できる反面、セキュリティの問題がある。例えば、ワクチンの開発については激しい競争があり、公の場で話せない内容もあるため断られることもある。何らかの形でバックグラウンドブリーフィング(秘密を守ってもらう)ができればと考える。
- ・4月から日本記者クラブでもオンラインで記者会見を開催している。日本記者クラブは全国に加盟社があるが、東京で記者会見を行っても様々な事情で参加できない者がいたが、今は zoom でライブ配信しており、質問についてもライブでできる。単に応急措置を超えた機能であり残していきたいと考えている。
- ・他方、インタビューにおいて表情というのは重要な要素であるが、オンラインの場合、画面上ではそれが読み取りづらい。周りにスタッフがいて指示を出されていてもわからないため、受け取れる情報が限られたものとなる。記者会見のオンライン化はこれまでのものにとって代わるものというより、可能性の拡大と考えて付き合う必要あり。

○日本科学未来館など他の機関との連携について

- ・具体的な調整は来期だと思うが、今のうちからできるだけ関係を広めたほうが 良い。(JT生命誌研究館、総合地球環境学研究所、人間文化研究機構、国立民族学博物館など) そういうところとの連携を計画として次期に申し送りしておいた方が良いと思う。
 - ・例えば、総合地球環境学研究所であれば、フューチャー・アースに関する協力など、学術会議の関係する個々の分野について、連携を強めることは重要。
 - ・連携に当たっては、分野などのターゲットを明確化させるほうがよい。
 - ・日本科学未来館などに協力を申し出る場合、学術会議への協力依頼ではなく、むしろ共同企画を提案する必要がある。
-
- ・新型コロナの影響を受け、デジタル化が進む一方、情報の格差が広がっているという意見もある。
 - ・新しい世界が広がってくると同時にリアルがあいまいになるジレンマがある。それらをつなぐことを学術会議が手伝えればよいと思う。サイエンスカフェは、密なコミュニケーションを目的としているが、それと同じ感覚をオンラインで再現できないか考えている。
 - ・サイエンスカフェについても動画を撮影し、学術会議ホームページに掲載できればよい。
 - ・最近、動画の競争相手も多い。サイエンスカフェの魅力が伝わるようなものでないといけない。
 - ・若者をターゲットにする場合、主体として取り込まないといけない。
 - ・地方の高校生の方が情報に飢えているという意見もある。東京の高校生には多数の機会があり、地方ではむしろ機会がないため、オンライン化が進めば地方でもネットでつながれる。地方の高校生を対象としてつながるのがよい。

- ・おもしろ情報館は古い情報だが、アクセス数が多い。それは授業の教材としてコンパクトで使いやすいからではないか。それを考えると、サイエンスカフェなどの動画を作成する場合、短く分かりやすいものを数多く配信した方が良い。

○学術フォーラム、公開シンポジウムのオンライン開催について

- ・シンポジウムは、今後オンラインと対面のハイブリッドで開催することになる。その場合の開催マニュアルや共通ルールを学術会議として整えて会員に周知することが大事。現在は、各主催者の力量や使用するツールに左右されている。
- ・シンポジウムのオンライン配信が課題。現在、学術フォーラムは事務局が徐々に出来るようになりつつある。他方、シンポジウムについては基本的に事務局がタッチしないため、企画者次第となっている。機材の問題はあるが、いつかはマニュアルを作成しないとオンライン化は広がらない。
- ・今日の学術フォーラムに関しても、参加できないが後日見られるかという問い合わせを受けている。編集作業や講演者の了解なども必要になるが、いつでも視聴できるようにできればよい。
- ・今期としては、録画者の了解や資料の著作権の問題をクリアしたら使ってよいことにしている。一応、録画だけはしている。システムとしては来期の課題としたい。
- ・オンライン化に伴い、旅費が浮いている。その余った予算で業者を使えないか。
- ・ハイブリッドや完全オンラインについては、国際的な学会がマニュアルを作っている。それに従って業者を使えばある程度のレベルで開催可能。
- ・ある程度のオンライン開催の知識を持った大学生にアルバイト代をだしてパートタイムで雇うことも考えられる。学生支援を兼ねられる。学生にとっても学術会議のシンポジウムに参加できるのはよいことだと思う。
- ・募集・期限のケアの必要もあるが、大学院生の専門的知識を持った者を複数名雇うのはありかもしれない。
- ・財務委員会としても検討課題としたい。